

院によって差があり過ぎるということ。8時間授業で教養科目8科目などという充実した学院で過ごした者、通学制2時間教養科目まったくなしという学院で育った者すべて准看護婦資格試験に合格した者といえ、受けた内容については確然たる差があるはずである。

100名ばかりのアンケートから抽き出して、それがすなわち全国准看護教育の欠陥を示すと判断することは軽率と思うけれど、100名ばかりの数の中に、こんなにも相違があるからこそ、問題として取り上げられるのだと思うのである。

このような不均等な学院を卒業すれば、准看護という名の下で、看護の重荷に耐えなくてはならないのである。過去の経験、待遇はさまざまであるが、ここに集まった

受験者たちは、そのほとんどが高校に進学し、7、8年の経験を有しても相当額の体給も投げうって進学を志願していこうというその熱意に、われわれは仲間ながら胸打たれると同時に、この志願者たちの皆が看護婦となるための、進学コースの設置が拡充されることを心からねがっています。

今回の調査終了後、計画、準備、出題項目、内容などに不備があったことを痛感させられ、これが、研究といえるかどうか疑問でもあるが、同僚である看護婦諸姉の中にも、准看護婦の実態をよく御存知でない方が多い現在、今後、看護チームを組む上にも、理解と了解の上の一つの資料にでもなればと思い発表させていただいた

ショート・ルポ▶

肢体不自由児の楽しい3日間

三 肢体不自由児の親子キャンプ開催 三

8月11日から13日の3日間、国立埼玉病院（埼玉県北足立郡大和町、院長 伊藤恭次郎）で《第3回肢体不自由児親子キャンプ》が催された。

このキャンプは、もともとナースや保健婦が「仕事にもっとも必要な人間関係や協力の精神を学びとる教育キャンプ」を目的とした自主的な集まりであったが、それだけではあきたらず「自分たち以外の人のためのキャンプ」にしたいと考え、看護関係キャンプ委員会（委員長 平野みどり）で、その対象に、家庭にとじこもる肢体の不自由な子どもたちを選んで、昭和38年から毎年おこなっ

てきたもの。

キャンプを実施するにあたって「だいいちに場所の問題があった。幸い、国立埼玉病院の伊藤院長をはじめ同病院付属高等看護学院の土屋教務主任が、全面的に好意を示され学院の夏休みを利用して実施することができた」と平野みどり氏はその苦心をこう語ってくれた。

このキャンプを側面から援助している整形外科医の柄田幸徳先生は「生活を楽しみながら、機能訓練の実を上げる最上の方法」と親ぐるみの治療効果を高く評価している。

子どもといっしょにキャンプに参



▲ 左から渡辺、平野、伊藤、土屋の諸氏

加した池田親さんは「子どもの新しい面をいろいろ発見し、子どもの指導について有益な示唆を与えられました」と表情も明るい。吉田祐章君は「栗の木や桜の木がたくさんあって、夜になると草の中で虫が鳴くし、天国です。看護婦さんと別れるときは涙が出ます」と不自由な口調で別れを惜しんでいた。

最後に、この催しの推進者の渡辺もとえ（都立保健婦助産婦学院長）先生に、このキャンプの印象をきいてみた。「はじめてきた時は、お互いに黙りこくって陰気な子どもたちも、キャンプ・ファイヤーをたき、スタンツ（寸劇）を出す頃になると、人がかわったように陽気になり、帰る時にはみんな友だちになります。この事業が多くの子不自由児のよるこびの場となるよう、これからもつづけてゆきたいと考えています。」

バスの窓から不自由な手をふりながら子どもたちは「サヨウナラ、また来年まで」と名残を惜しみながら遠ざかっていった。

◀ 戸外食事をする参加者 [志摩夏人]

